

〈資料〉

外国人模擬患者参加型看護演習で学生が認識する工夫・実践できたことと今後必要と考える力

Students' Ingenuities, Practical Accomplishments Perceived by Students, and the Skills they Consider Crucial for the Future
-Through nursing exercises involving foreign simulated patients -

山崎千寿子¹ 谷本真理子¹ 松尾まき¹ 中山純果¹ 大堀美樹¹ 本谷園子²

1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

2 東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科

Chizuko YAMAZAKI¹, Mariko TANIMOTO¹, Maki MATSUO¹, Junka NAKAYAMA¹, Miki OHORI¹, Sonoko MOTOTANI²

1 Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

2 Postgraduate School of Healthcare, Postgraduate School, Tokyo Healthcare University

要 旨：【目的】看護学生の外国人患者への対応力の評価項目作成に向けた基礎資料とするために、外国人模擬患者参加型の看護演習に参加した看護学生が認識する演習で工夫・実践できたこと、今後必要と考える力を明らかにする。

【方法】外国人模擬患者参加型の看護演習に参加した看護学科3年生を対象にWeb調査を実施した。演習で工夫・実践できたこと、今後必要と考える力について記述されている内容を抽出し、質的記述的に分析した。

【結果・考察】11名より回答を得た。工夫・実践できたことは16のサブカテゴリと8のカテゴリ、今後必要と考える力は26のサブカテゴリと9のカテゴリが抽出された。語学力、異文化理解の知識は本演習だけでなく、関連科目との積み重ねにより獲得に繋がる可能性が示唆された。

【結論】看護学生が演習で身につける外国人患者へ対応力が明らかになった。今後は関連科目も含めて評価可能な汎用性のある評価項目の作成が必要である。

Abstract : Objective: To identify, through nursing exercises involving foreign simulated patients, the students' ingenuities, practical accomplishments perceived by students and the skills they consider crucial for the future. The findings are expected to be utilized as foundational material for developing evaluation criteria for assessing the ability to respond to foreign patients.

Methods: A web-based survey was conducted targeting third-year nursing students who participated in a nursing exercise program with foreign simulated patients. The content describing students' ingenuities, practical achievements, and the skills they considered necessary for the future were extracted and subjected to qualitative and descriptive analyses.

Results & Discussion: Responses were obtained from 11 participants. Regarding students' ingenuities and practical achievements, 16 subcategories and 8 categories were extracted; while regarding the skills they considered necessary for the future, 26 subcategories and 9 categories were extracted. The findings suggest that language proficiency and knowledge of cross-cultural understanding can be acquired not only through this exercise but also through cumulative learning in related subjects.

Conclusion: The ability to respond to foreign patients that nursing students acquired through practical exercises was clarified. In the future, it is necessary to develop

widely applicable parameters that can be used for the evaluation of related subjects as well.

キーワード：異文化対応能力、外国人模擬患者、看護学生、看護実践、コミュニケーション

Keywords：Cross-Cultural Competency, Foreign Patient Simulators, Nursing Students, Nursing Practice, Communication

I. 背景

日本における在留外国人数はCOVID-19の影響で一
時減少したものの、2022年末には初の300万人を超え
1)、今後も増加することが予測される。また、医療を
利用する外国人も増加しており²⁾ 医療ケアを担う看
護師の外国人対応力が求められる。しかし、外国人患
者を看護する日本人看護師は言語の壁によるコミュニ
ケーションの困難さを感じており^{3) 4)}、日本人看護
職の文化的対応能力は諸外国に比べて低いことが明ら
かにされている⁵⁾。文部科学省が策定した「看護学教
育モデル・コア・カリキュラム～学士課程においてコ
アとなる看護実践能力の修得を目指した学修目標～」
に、「在日外国人の文化的背景を考慮した看護を理解
できる」ことが挙げられており⁶⁾、先行研究では外国
人模擬患者を対象としたコミュニケーション教育など
が報告されている^{7) 8)}。本学医療保健学部看護学科で
も2018年度に有志によるグローバルナース育成開発プ
ロジェクトチーム（以下GNP）を発足し、本学の「実
践に強い専門職の育成」の理念に基づき、多様な文化
的背景をもつ外国人患者への対応力の育成を目指し教
育プログラムを検討した。このプログラムの特徴は、
外国人模擬患者参加型の看護演習（以下、演習とする）
であり、文化的多様性に満ちた対象者に対峙する看護
実践者には、学びながら考え、行動する力が必須とな
る。しかし現段階において、我々はプログラムの教育
成果測定指標の策定には至っておらず、先行研究にも
みあたらなかった。学習者の自律的な学修のためには
学習者自身による評価が重要であり、今回、学生が認
識する工夫・実践、今後必要と考える力を明らかにす
ることで、学習者自身の評価を加味した評価項目作成
の基礎資料になると考えた。学習者自身の評価を明ら
かにすることは、看護基礎教育において、社会のグロ
ーバル化に対応できる看護職育成に向けた教育および評
価方法構築の一助となる点で意義があると考ええる。

II. 方法

1. 演習内容

本演習は、2020年度から実施している「糖尿病と診
断された外国人患者への看護支援」である。本演習の
対象は看護学科3年生であり、参加は任意である。英
語を話せる外国人模擬患者に対して、学生3名が1グ
ループとなり、web会議システムを用いてオンライン
での演習を実施した。演習内容は、1日目に情報収集
と看護に関する英語のシナリオを作成し、2日目に外
国人模擬患者に対して英語を用いて情報収集を行い、
必要な看護を考え、3日目に看護を実施する構成であ
る。（詳細は大堀らの報告⁹⁾を参照）

2. 研究対象者

2020年度GNPが実施した演習に参加した看護学科
3年生12名。

3. 調査期間

2021年1月19日～2月5日

4. 調査方法

Microsoft365のアンケート機能を用いた無記名自記
式のWeb調査とした。プログラム終了後に対象者に
研究の趣旨と内容、倫理的配慮について文書と口頭で
説明し、Web調査のURL、重複回答を避けるための
ID番号をメールで配信し回答を依頼した。

5. 調査内容

- 1) 本学における海外研修経験、海外留学経験、外
国人と日常に触れる機会の有無
- 2) 本演習において、以下の自由記述を求めた。
・「コミュニケーション」、「文化的背景の理解」、「生
活習慣の理解」のそれぞれについて①「工夫・実
践できたこと」、②「今後必要と考える力」
・③「対象が外国人であることでの難しさ」、④「②
以外で外国人患者に対応するために今後身につけ

たい力」

6. 分析方法

学生が記述している調査内容①から「工夫・実践できたこと」として記述されている部分、調査内容②③④から「今後必要と考える力」として記述している部分を抽出し、意味内容を変えないように要約しコード化した。相違性と類似性に沿ってサブカテゴリ化、カテゴリ化した¹⁰⁾。分析にあたっては、共同研究者複数名で検討した。

7. 倫理的配慮

本研究は東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理審査委員会（教32-29A）の承認を得て実施した。研究の趣旨、研究参加の任意性の保障、途中辞退が可能であること、個人情報保護、匿名性の保障、参加の可否が成績に関係しないことを文書と口頭で説明の上、同意書による同意を得た。

Ⅲ. 結果

同意の得られた11名より回答を得て（回収率91.7%）、11名全員を分析対象とした（有効回答率91.7%）。

1. 対象者の属性

11名のうち、「本学の海外研修参加経験あり」が3名、

「海外留学経験あり」が2名、「外国人と日常的に触れる機会あり（外国人の友人や家族がいる）」が2名であった。

2. 学生が認識する演習で工夫・実践できたこと、今後必要と考える力

学生が認識する工夫・実践できたことでは49のコードがあり、16のサブカテゴリと8のカテゴリが抽出された（表1）。学生が演習を通して今後必要と考える力については、58のコードがあり、26のサブカテゴリと9のカテゴリが抽出された（表2）。

Ⅳ. 考察

1. 学生が認識する工夫・実践できたことと今後必要と考える力

学生は外国人患者に看護を実践するために英語が苦手でも【英語で伝えようとする姿勢をみせる】、【相手に伝わる工夫をする】ことをしながら、対象理解のために【その国の慣習や宗教を理解する】、【日本人との違いを意識した療養方法の提案をする】ことを実践できたと認識していた。これは、本プログラムの構成から、準備した内容については実践できたと認識したと考えられる。本演習の参加者は3年生で糖尿病や看護過程は既習内容であり、看護実習経験もあることから、【身につけてきた看護の姿勢をもってかかわる】実践につながったと推測できる。また、必要な情報収集、

表1 外国人患者に看護実践を行う演習で工夫・実践できたこと

カテゴリ	サブカテゴリ（コード数）
英語で伝えようとする姿勢をみせる	英語力が不足していても英語で伝えようとする姿勢をみせる（1）
自分の英語力を使う	自分の英語力で、聞く、伝える（2）
相手に伝わる工夫をする	話し方や資料を活用して相手に伝わる工夫をする（4）
相手と話しの最中に英語がわからない時の対処をする	相手に確認したり聞き返して話の内容を理解する（7）
相手へのわかりやすさ話しやすさをふまえた会話をする	よりよい看護の実践に向けて英語を咄嗟に調べて質問する（1）
その国の慣習や宗教を理解する	相手の状況に合わせて自分の話し方を変えたり身振りを用いて会話する（4）
	英語で会話の間をつなぐ相槌を打ちながら会話をすすめる（3）
	相手の国と日本の違いから日本での生活を理解する（4）
	相手の国の食習慣や生活習慣等について相手に尋ねて理解する（4）
	宗教上の制限や慣習について対象に確認し理解する（3）
	相手の国の食事や生活習慣等について事前に調べて理解する（2）
日本人との違いを意識した療養方法の提案をする	日本との食事や生活習慣の違いを知りケアを考え提案する（3）
身につけてきた看護の姿勢をもってかかわる	質問の仕方を工夫して対象の生活を理解する（7）
	対象の生活に合わせた支援を提案する（3）
	治療上必要なことに対してできていることや難しいことが何かを理解する（2）
	相手の話に同意を示しながら会話をする（1）

表2 演習を通して外国人患者に看護を実践するために今後必要と考える力

カテゴリ	サブカテゴリ（コード数）
英語を使用して話す意思と姿勢	英語力が不足していても対象とコミュニケーションをとろうとする意思をもつ（4）
	自分の英語が十分でなくても自信をもって話す（1）
英語を聞く、伝える語学力	生活習慣や文化的背景を詳しく質問できるための英文を作る力（5）
	相手の話している英語を聞き取る力をつける（4）
	相手に伝えられる英語力（2）
医療英語の知識	医療英語の知識を身につける（1）
英語がわからないなりに対応する力	英語がわからなくても相手に確認する（1）
	英語をその場で調べて対応する判断力（1）
感情豊かに雑談を交えた英会話力	相手に同意したり共感を表現できる英語を用いて会話する（3）
	対象との雑談や日常会話を英語のできる（3）
その国の医療や慣習などの特性に関する知識	その国の医療制度や疾患に対する考え方を知る（4）
	その国の情報を日頃から関心を寄せて知っておく（2）
	その国の文化や情報を学ぶ（2）
	その国のジェスチャーの意味を知る（2）
異文化理解とかかわりへの積極的関心	日本との違いを考えながら相手の国の習慣を理解しようとする（4）
	外国人と積極的にかかわろうとする（1）
異文化を考慮した看護を実践する力	異なる習慣や文化であることをふまえて判断し看護を考える力（4）
	日本で生活する外国人の状況を考慮した看護を考える（2）
	文化的違いから相手に失礼にならないような英語で質問する（1）
	文化的背景を考慮した理解した支援かどうか対象の反応から評価する（1）
	日本の医療や看護になじむような働きかけ方（1）
より良い看護を実践する力	生活習慣をより詳しく情報収集できる力（4）
	柔軟に考え対応する力（2）
	対象にとって望ましい生活に近づける支援を考える力（1）
	看護を実践する力（1）
	臨機応変に対応できる力（1）

対象にあった看護実践には、準備していた英文だけでは不十分であり、【相手と話の最中に英語がわからない時の対処をする】や相手の状況に合わせて【相手へのわかりやすさ話しやすさをふまえた会話をする】ことを実施したと考える。一方で、日本人を対象とした看護実習経験があるからこそ、語学力の不足による情報収集や対象理解の不十分さを感じ【医療英語の知識】、【英語を聞く、伝える語学力】が必要であると認識したと考える。学生は、看護者として対象に同意や共感を表現したいが言語の壁によってもどかしさを感じ、【感情豊かに雑談を交えた英会話力】が必要であると認識していた。本プログラムでは、演習の最後に外国人模擬患者から自国の医療制度や健康問題等の情報提供の機会があったことで、学生は異文化理解をふまえた対象理解や教育支援内容の不足に気づき、今後身につける必要があると認識したと推測される。

3. 外国人患者への対応力の評価項目作成に向けた今後の展望

本研究で見いだされた学生が認識する工夫・実践で

きたことと今後必要と考える力は、原らの報告による外国人患者をケアする上で必要な能力¹¹⁾と類似する内容であった。医療英語の知識や英語力、異文化理解の知識は、本学科での英会話や国際看護論等の科目で学習する内容と関連しており、それらの積み重ねを可視化できる評価項目を作成する必要があると考える。2021年度よりGNPは看護学科「グローバル化への対応検討プロジェクト」となり、看護基礎教育におけるグローバル人材に必要な力、関連する科目と学修機会を整理した。本調査で得られた結果を参考に、関連する科目も含めて外国人患者への対応力を可視化できるよう共通の評価項目を作成することが課題である。

V. 研究の限界

本研究で得られた結果は、英語を用いたコミュニケーション、文化的背景や生活習慣の理解に焦点を当てた演習内容に相応した結果であり、本プログラムの評価指標の一助になるといえるが、外国人患者への対応力を評価する上では限定的である。また、本研究の

対象者は3年生であり臨地実習の経験が結果に影響していると考えられ、1、2年生の場合は異なる結果である可能性があり、今後はさらに看護基礎教育における汎用性の高い評価項目の作成が課題である。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は東京医療保健大学医療保健学部看護学科特別研究費の助成を受けて実施した。

引用文献

- 1) 法務省出入国在留管理庁. 令和4年末現在における在留外国人数
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001393064.pdf>
(2023.7.4閲覧)
- 2) 生労働省. 令和3年度医療機関における外国人患者の受入に係る実態調査結果(概要版)について.
<https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000958129.pdf> (2023.7.4閲覧)
- 3) 安達由希子, 小川美奈子, 佐竹紀子, 日詰有希子, 三河真弓, 牧本清子. 外国人患者のケアに関する公立病院の調査. 大阪大学看護学雑誌 2009; 15 (1): 19-31.
- 4) 谷本真理子, 山崎千寿子, 本谷園子, 他. 日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた実践的課題探究の取り組み. 東京医療保健大学紀要 2019;14(1):145-152.
- 5) 野地有子. アジア圏における看護職の文化的能力の評

価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究. 科学研究費助成事業研究成果報告書 2017.

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-25253107/25253107seika.pdf> (2023.7.14閲覧)

- 6) 文部科学省. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～学士課程においてコアとなる看護実践能力の修得を目指した学修目標～.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf(2023.7.14閲覧)
- 7) 宮津多美子, 藤倉ひとみ, GROW Deborah. シミュレーションで学ぶ異文化看護の実践 看護学生を対象とした外国人模擬患者演習報告. 順天堂大学医療保健学部医療看護研究 2018; 14(2):9-18.
- 8) 古川智恵. 日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習-看護大学生の学びの評価-ヒューマンケア研究学会誌 2021;12(1):29-35.
- 9) 大堀美樹, 本谷園子, 松尾まき, 山崎千寿子, 中山純果, 谷本真理子. 看護基礎教育における異文化対応能力の向上に向けた教育演習プログラム～模擬患者参加型演習の成果と課題～. 東京医療保健大学紀要 2022;17(1):75-81.
- 10) Holloway I., Wheeler S. 第4部データ分析とまとめ. 於: 野口美和子監訳. ナースのための質的研究入門 研究方法から論文作成まで 第2版. 東京. 医学書院 2006; 231-236.
- 11) 原明子, 柳澤理子. 日本人看護師が外国人患者をケアする上で必要な能力-文献レビュー. 愛知県立大学看護学部紀要 2020; 26: 17-28.